■疎開・学校生活

学童疎開を顧みる

◆青木　吉實（58歳）

疎開・学校生活●

昭和十九年八月下旬戦局の進展に伴い、都会地の学童は、学校別に分散され、山地への疎開を余儀なくされた。それが世に言う学童疎開である。当時の芝地区五校（神應、白金、南海、御田、鞆絵）は、栃木県塩谷郡藤原町の川治温泉街の旅館に疎開学童としてお世話になる。

当時学寮長を務められた、鈴木敏夫教諭は、創立四十周年記念号に、次のような記録を寄せられている。

「八月二十六日の出発に当っては、地元の盛大な壮行式も行なわれた。出征兵士を送る心意気と何ら変りない。リュック一ツ背にしたいたいけな学童の痛々しい姿、行列、送るもの送られるもの共に涙の訣別、断腸の思い。後髪ひかれる思い。たとえ国策とはいいながら悲壮であった。」（「川治の疎開」より）

大人達の感極まる思いの中で、百九十四名の学童は惜別と不安の思いで、天現寺を後にした。都電二台に乗車した私達は、浅草にて東武線に乗り換え、藤原町へと向った。その間、途中の今市にて、地元の方々からのカキ氷の差入があり、青菜が萎（しお）れかかっているような私達には、何とも言えない「ゴチソウ」であった。息を吹き返した私達はそれから間もなく藤原町駅へ到着、やっと到着したと思うや、今度はトラックにて十二キロ程の道程を輸送されて行った。乗りかえるたびに東京が遠くに感じられ、胸が熱くなった事を記憶している。

ようやく川治にたどり着いた時は、陽も西に傾き、目前には「神應国民学校の皆さんお待ちしておりました。」歓迎の意を現す大きな立看板、それを取り巻く地元の方々が、暖かい笑顔で迎え入れて来れた。到着したという安堵（あんど）感からか部屋へ案内され、親元からの発送品が目に入った時は、転がるように荷物に身体を横たえた。明日から親のいない生活が始まる。最上級生として、しっかりしなくてはと言う記憶の中で、強い眠気に吸い込まれていった。

疎開生活を二、三日過ぎた頃には、もう家の事を考え始めていた。眠れぬ夜は屋外へ出て、多分こちらが東京方向であろうと思う星空を仰ぎ、何やら話しかけていたような記憶が

ある。疎開当初はさして不自由はなく、ある意味では順調な滑り出しであった。

しかし今日にして考えて見れば、当地は男鹿川沿いに少々の盆地、したがって耕地面積も少なく、地元民に空腹を与えないだけの作物しか収穫できない。そこへ二百人近い学童が何の国家対策もなく、民間だけを頼りとする疎開そのものが無理であった。

三ケ月も過ぎた頃には徐々に食糧不足と、質の低下、学寮長を始めとする引率の先生方も、食糧の調達に懸命であったと思うが、何分にも口数が多すぎる。次第に疎開学童達は体重減少、体力低下と悪循環が積み重なり、それに伴い、一方では食糧の耕作、一方では、東京の地元から小寺奉仕会長等による援護物資、東京とて余る食糧などあろうはずもないのにと、子供心にも感謝の気持で胸がいっぱいになったものである。

やがて寒い冬の訪れと共に事態はますます悪化している様子も伝わって来た。この頃になると都会地の空襲の情報がちらほら耳に入り、家族への安否と郷愁にかられ、今生の別れにと家族一同で撮った写真を箱の中から出しては、ありし日に思いをはせた。その中で子供達の唯一の楽しみは、母の面会であった。食糧への期待はあまりなかったが、親との会話は何にもまして嬉しかった。積雪の多い冬の日を幾日か過ぎた頃、私達にも正月がやって来た。例年であれば楽しみの一つであるはずであったが、家族の無いこの集団生活にあっては、新年を迎えると言う気分では無く、暖かさと空腹感さえ満たされればそれで良かった。それでも元旦には正月料理が膳いっぱいに広がり、私達の目を喜ばせてくれた。

しかし私の場合はどういうわけか、その大切な、「ゴチソウ」に足がはえて姿を消してしまった。唯でさえ空腹で仕方のない毎日であるのに、一食ぬきとは誠に残念、無念とウラミにウラミ、ウラミ眠ってしまった。今でも忘れられない事である。食物のウラミは実に恐しいものだ。

正月も遠のき、寒さの幾分やわらいだ三月六学年は、中学受験のため帰省する事になった。

疎開先宛の葉書

（港区教育史資料）

大戦下の氷川国民学校

◇浅野　澄雄（74歳）

私が小学校教諭として渋谷区から港区へ転勤したのは昭和十九年四月で二十九歳の張り切っていた時であった。当時の氷川国民学校は戦時教育で有名で、見学者がたくさん来た。月曜の朝礼には魂の太鼓といって山鹿流の陣太鼓を打ち丹田に力を入れて聞いた。また全児童と男子教員は上半身裸になり、乾布摩擦をした。授業は勤労、愛国、戦意高揚をむねとし、集団行動、相撲、柔道、剣道、薙刀（なぎなた）等をも多く取り入れて行った。校内の掃除には全員鉢巻をし、日の丸行進曲に合せ、全校一斉に雑巾を持って床みがきをした。

戦争はいよいよ激しくなり、米軍の本土空襲に備え集団疎開が始まった。四月末頃から南多摩の金剛寺・寿徳寺・南養寺・見心寮の四か所で行った。疎開地が近いので児童が親元に帰りたくて無断で脱走するので探したり連絡をしたりして大変であった。縁故疎開の出来る者は出来るだけ勧めたがどうしても出来ない者を集めて学区の三ヶ所で寺子屋教育を行った。私は区役所との交換便・疎開地との連絡・学校の留守番・寺子屋教育の責任者として残された。私の担当した寺坂氷川神社での寺子屋教育は都でも初めての試みで、松下村塾の例をあげて話をした。その時の様子が各新聞に写真入りで報道された。そのころ三月の下町の空襲で焼け出された城東病院が空教室になった二、三階を利用して開業した。地階は軍が一部使用し、もっぱら屋上での監視をしていた。また立派な地下防空壕が造られてあり、四十～五十人は収容できた。

五月二十四日の夜激しい空襲を受けた。敵機B29は探照燈に明るく照らされるが日本軍の高射砲が当たらず、迎え撃つ戦闘機がない。焼夷弾（しょういだん）を投下すると鉄製の六角筒に入った三六本がプロペラの回転で自動的に帯が切れ散る仕組で風を切って落ちて来る。屋根を突き抜け、筒の中から粘体が飛び出し、塀だろうと瓦だろうと附着し、ガソリン臭く激しく燃え出すので木造家屋等は一たまりもない。縄の火たたきを水につけ払い除ける演習は何の役にもたたなかった。逃げまどう人々で、消すどころの騒ぎでは無かった。

最初は日技神社付近から、次いで学校の北側から、また三

井邸（現アメリカ大使館員宿舎）からものすごい炎が上がった。三井邸は高台で風当たりが強く銅板葺きであったためか紅と緑の炎は凄惨（せいさん）というか美しいというか地獄絵のようで長時間燃え続けた。B29は我者顔に高度を下げ炎の上を紅く照り返しながら、血を浴びた悪魔のように憎々しく旋回してまわった。

炎の海の中を住民の多くが氷川校へ逃げて来た。運動場は火の粉が渦を巻いて吹き荒れている。大銀杏（いちょう）の支柱も鉄棒の木柱も割れ目に火の粉がささり見る間に燃え尽きた。人々はバケツを手にただおろおろしている。それらの人達を廊下に並ばせ、玄関にあった病院の寝台、マット、布団、下駄箱が燃え出して来たのをプールからの水で消させた。停電で真暗なため、水はいくらも運べなかったがそれでも役に立った。任せて二、三階を見まわりに行くと理科室のカーテンが強風であおられ開いた窓からの火の粉で燃えている。飛びついて引きちぎり水槽につけて消し止めた。暗闇で持って来た小刀が分らず窓を縛る紐が切れない。義弟を職員室へ鋏（はさみ）を取りにやったがなかなか戻って来ない。階段が煙突状に煙を吹き上げ、窒息し倒れていた。活を入れ職員室へ連れて行った。階下の注水の列が誰もいない。「時限爆弾が落ちたから避難しろ」との警防団のデマで皆逃げてしまった。プールへ行って見ると避難者が数人バケツをかぶり水の中にしゃがみこんでいる。「校舎が燃えたらいられるか」、と叱りつけ、また注水を続行し、夜明けまでかかった。

夜が明けたら校舎を残し、学区がほとんど焼野原でびっくりした。高台に朝日を受けた校舎が黄金に輝いていた。燻（くす）ぶる煙の中を罹災（りさい）者が続々と学校へ集まって来た。区役所から「罹災（りさい）証明書を書いてやって下さい」、との事で校庭に机を出した。罹災者の列が校庭を埋め、水も食もとらず夕暮まで書き続けた。空腹さえ気がつかなかった。やれやれと校舎に入ったら罹災者でごったがえしている。職員室だけはと出てもらうと急に疲れが出て床に倒れるように寝てしまった。夜が明けてみると大変だった。停電で電燈も水道も止まり、手探りの便所は大小便で汚れ切っており、校庭の囲りの溝までが便所となって悪臭がはなはだしい。尋ね人が来ても探しようがない。そこで町会長を集め部屋割をした。便所掃除やら仮設便所を屋外に造ったりした。死者が出たが、身元が分からず死臭が出て来た。やっと許可を得て焼け跡にトタンをかぶせ、焼け残りの電柱を掘って薪にし、焼いた。後始末や児童との連絡もまた大変であった。

七月七日、ついに私にも召集令状が来た。城東病院に入院している母を妻にたくし、氷川神社から皆さんに送られ、征途についた。

疎開生活の悪戦苦闘

◆池田　愛子（82歳）

学童疎開の次男と長女も家で一緒に暮らすようになった八月十五日にやっと終戦を迎えてほっとしたが、主人は毎日朝早くから超満員の「殺人電車」にのって東京に仕事をさがしに出かけた。残る私たちは見知らぬ土地で心細さが身にしみた。両隣が農家なのに「東京者、疎開者、一膳めしは情けない」と雨戸を叩いて馬鹿にされた。裏の少しの空地にかぼちゃ、胡瓜を作って、やっと実がなったころ隣の農家のおじさんが蔓を切っていじわるしたり、下肥を取ってくれないので、桶を借りて主人と汲み取りをしたけれど、馴れないのでピチャピチャして体中に付いてしまいどうしようもなかった。

田舎に来たが食糧と燃料に困った。朝起きると八人の家族になにを食べさせたらと思うといても立ってもいられず買出しに出かけた。田舎を知らない私は道に迷い、雑木林の中に入ってしまい、恐くなって夢中で歩いてやっと道に出たところに一軒の農家があった。入って話をしたら、町から三里も来ているよといわれておどろいた。そこで電球を持っていたのでさつま芋二貫匁と取りかえてもらった。毎日一里半から三里の道を食糧を求めて歩いた。ある農家では「町では缶詰が配給になったのだから持って来たらかぼちゃをやる」とか「衣料を持ってこい」とか食べることにはかえられないので綿沙の着物と羽織二枚とを米三升と取り替えた。着る物もだんだん食糧に代わり、やがてみんな食べてしまった。買うのに早朝に並んでやっと手に入れた小麦粉を挽いた粕のフスマの中に雑草を入れてふかすとパラパラになって食べられない。大豆粕に大根を入れたり草を入れて食べている隣の馬のほうがよほど良いと思った。

隣の農家の子供が白米のおにぎりを家の前にきて食べているのを見て三歳と五歳の子が「ちょうだい、ちょうだい」と泣くので本当に悲しかった。毎日かぼちゃとお芋ばかり食べるので家の者は体中黄色くなって黄疸と間違えられたこともあった。また、燃料に困って朝早くから山に薪を取りにいきやっと背負ったところを山の持ち主に見つかり捕まってしまい、疎開者で知らずにしたことを話をしてわびると、かえっ

て同情され、荷車いっぱい薪を売ってくれた。あの時ほど人の情けと人間関係のありがたさを痛感したことがなかった。

それから少しでもお役に立てばと娘と一緒に子供会を作った。「仲良しこども会」と名付けて早朝から道端の掃除をしたり、毎晩四十～五十人の子供が部屋に入りきれないほど集まってきて歌をうたったり、ハモニカを吹いたり、いろいろなお話をしたり、遊んだり、楽しい日が続いた。主人は東京へ通っても収入がなく貯金も少なくなり、私も何か収入の道をと、洋裁を知らないのに大胆にも「婦人子供服仕立修繕致します」とカンバンを出してしまった。早速農家の人たちが学生服で、女の子の上衣を作ってくれとか、子供の本股のズボンを作ってと言われて困ってしまい、本を見たり家の子のズボンをほどいて型を取って縫ったりしてその仕立代が三十円、四十円位頂くと一日の食事代になってしまった。でも毎日仕事に追われてうれしかった。

二十二年の暮に二年半のいろいろな思い出を残して東京に引き揚げることにした。大勢の子供たちが別れを惜しんで涙で送ってくれた。またおなじみになった農家のおじさんが食糧をたくさん持ってお別れに来てくれた。やっと新橋六丁目に戻ってきたが、新橋駅の周辺の闇市、パンパンと言われながら米軍兵士と腕を組んで町を歩いている女性の姿、戦災孤児が物貰いのようにうろうろしている姿を見た時、愕然(がくぜん)とした。

また苦労が始まった。八人分のお米の配給は僅(わず)かで、かわりにザラメ「砂糖」一斗缶一杯、さつま芋が俵に一俵半が配給になったけれど、お腹の足しにはならないので千葉県松戸から馬橋まで買出しに行った。やっと新橋駅についたら張り込み中のお巡りさんに見つかり品物はみんな取り上げられた。本当に泣くにも泣けない情けない気持ち、今でも忘れられない。

なんでも闇値(やみね)で、一生懸命働いても間に合わない頽廃(たいはい)した社会の人達を見て、このままでは青少年が不良化するばかりだと思った。町内会防犯母の会に参加して少年野球、幼年野球の世話をしたり、子供会、ＰＴＡ活動、婦女子の集会、青少年や幼い子供たちのためにわが身を惜しまず活躍した。けれど戦後四十五年もたった今、日本は平和に見えても、物が豊富でも、物の心が分からない。公害や物価高に悩まされて人の心は不安に満ちている。

頽廃した社会の子供や若者の人間性を養うのは大人達の責任であると思う。あの悲惨な戦争の恐ろしさ、人の命の貴さを後世に語り伝え多くの人々に知って頂きたいと思う。世界平和を祈念してやまない。

集団疎開までの青春

◆石井千枝子（66歳）

港区で生まれ育ち、そして三八年間退職まで港区小学校に勤務できた私のふるさとは港区です。青山表参道入口の近くに住み、物心ついた時から代々木練兵場に駆け足行進する兵隊を見る毎日でした。息が苦しく倒れる兵隊を上官は叱咤激励し、果ては足げにする姿を何度見たことでしょう。六年の時の二・二六事件、女学校時代の白衣縫製、そして第二次大戦へ突入してしまいました。

私の家は昭和二十年二月大雪の夜、カランカランという音と共に焼夷弾を屋根に落とされました。ひとりだった私ですが隣組の方と物干し台からどのように登ったか、今だに記憶がないのですが、路上に焼夷弾を投げ出し家を守ることができました。大雪のおかげで発火もせずホッとしました。翌朝見ると、向かい側の南町が全焼しており急に恐ろしくなったのを覚えています。その家も五月大空襲で灰と化し、多数の犠牲者が出ました。防空演習で広い表参道に避難する練習をしたためか集まったようですが、広い道に火のうずができてしまったのです。父は警防団長で皆が出たのを見届け、最後に火の粉がすごいため鉄かぶとで水をかぶりながら、青山墓地に避難したそうで、私は孤児にならずに済みました。一週間後、集団疎開に行っていた私と、千葉へ引き揚げた父と待ち合わせ、焼野原となり原宿の駅まで何もなく見える我が家の跡で呆然と立っていました。その時、近くの井戸から同じ隣組の方の遺体が引き上げられ、大ショックでした。まだ述べたい事が多いのですが、決められた紙面の関係で集団疎開のことに集中させていただきます。

昭和十九年麻布小学校に赴任、その年の夏疎開開始となりました。栃木市から入った五村の八つのお寺に別れ、先生は二人ずつぐらいで大変でした。私は二十年三月、第二次集団疎開で一、二、四年を連れ、農村の山上にある持明院という寺に合流しました。生まれて初めて親元を離れるのは児童と同じです。先生とは言え、寮母・作業員の仕事もすべてやり、まさに二四時間勤務の毎日でした。今考えると、若かったからやりとげられたと思っています。

山の下にある井戸から毎日水をかつぎ上げたり、山を開墾

して畑を作り肥桶もかつぎました。川へ洗たくに、また野菜が全く無くなり児童とニラを取りに行ったこと、毎日下駄の鼻緒のすげ替えをしてやり、次から次へと生まれて初めての経験でした。

初めは村の学校に出かけ村の児童といっしょに学習し、楽しい遠足にも行けました。空襲が激しくなるにつれ、学習も寺の本堂でやることになりました。五年になっても、夜地図をかいてしまう子がおり、いろいろ治療を工夫してどうにか直りました。アッという間に、墓前に供え雨に打たれただんごを食べてしまったり、ずいぶん心配しましたが不思議におなかもこわしませんでした。

農村とはいえ食糧は乏しく、大豆等のまじった御飯を各自のどんぶりの底に少ししか与えられず、育ち盛りの児童にはかわいそうでした。本堂で配膳をしていると、全員が目を凝らして見つめています。そのうち「御飯は石井先生に配ってほしい。」と皆が申し出てきました。理由を聞くと、寮母や作業員の方は配っていってたりなくなると、今まで配った中から取って減らし全員のを仕上げたのです。何気なくやったのですが、私は初め少な目に全員に配り、残るとおまけのように増していったのです。量は同じですが、それほど児童は敏感だったのです。戦後給食の配膳をするたびに思い出された光景です。

栄養の関係か（かいせん）という皮膚病にかかる子が多く、またノミ・シラミも広まって大変でした。毎晩入浴が済むと、全員の下着を硫黄で煮つめ殺しましたが絶滅しませんでした。「東京に帰れる日が来るのだろうか。」と児童と散歩し歌を歌ってまぎらわせながら涙を流していた心細い先生でした。

そのうち思いがけなく、隣村の寮の女先生が雨中食糧集めに回られ、肺炎となり四〇度以上の発熱でした。各寮の女先生全員が看病に全力を尽くしましたが、数日後帰らぬ人になってしまいました。昨日のように思えます。

東京へ帰りたいと寮を抜け出し、東京と反対方面へ歩いていた児童を無事連れ戻したこと、急性盲腸炎の児童を宇都宮空襲の夜、栃木市の病院で手術させ無事朝を迎えた時の喜び、児童へ順番に添い寝をしてやり、意識していなかったことが、今五十代後半になる方たちですが忘れられない喜びだったと語ってくれます。終戦を迎え、不安な気持でしたが十月には帰京でき、戦後の困難が待ち構えているのも知らず、自分の家が焼けて無くても東京へ帰れた喜びは大きいものでした。

二度とあってはならない戦争。今の子供たちを見ていると幸福そのものです。疎開生活は夢を見ていたのではと思われる程です。

防空壕にダイビング―疎開先での体験―

◆大川　甚一（55歳）

私は昭和十九年春、桜川国民学校の四年生でした。その年の第二学期には一組から四組迄の生徒の全員がそれぞれ縁故疎開また、集団疎開で塩原へとばらばらになってしまいました。その際、現皇太后陛下より疎開児童に贈る歌を賜りました。

「次の世を背負うべき身ぞ逞しく
　　正しく生きよ里に移りて」

今でも辛い時へこたれそうになった時この御製を思い出しますと力が湧いてくるようです。さて縁故疎開で茨城県の常陸小川に移って秋の運動会の予行練習中の事です。いきなり警戒警報のサイレンが鳴り出し、しばらくすると、すぐ空襲警報のサイレンが鳴ったのです。せっかく安全だと思い東京より百キロほど離れた所に疎開してきたのにわずか数ケ月で空襲に見舞われるなんて、と子供心にも思いました。その後体操の時間の時、運動場で機銃掃射に会いそうになりました。「ヴォートシコルスキー」という艦載機でした。ある日友人の家で朴の木で零戦のむくの模型を作っていた時でした。空襲警報のサイレンが鳴り家人や近所の人達は防空壕に避難していました。「お前達早く避難しろ」友人の母親がかん高い声で叫びました。いま少しで出来上がる、いま少しやろうと友人と一緒に数分作業をし、やっと出来上がったので裏口から防空壕へ行こうとした時でした。防空壕のすぐ上の方に三メートル位に見えた「ヴォートシコルスキー」が見えました。すると「パンパーン」と機銃の音がして友人と私は二メートル位の防空壕にダイビングしたので一命危うく助かったのでした。家でも当時貴重品だったガラスの戸を破り、二発の機銃弾が土間に入っていました。確か二十数センチメートルの所に銃弾があったように記憶しています。これ以後空襲警報のサイレンが鳴った時は、縦穴でも横穴式でもすぐに防空壕に避難するようになりました。

集団疎開の頃のこと

◆岸田　芳郎（81歳）

疎開・学校生活●

私は昭和十三年から二十年間、神明小学校に勤めていたので、集団疎開の頃のことについてはいろいろな思い出がある。

昭和十九年八月末に鬼怒川温泉に三年生以上の児童が集団疎開したが、他に知己を頼って縁故疎開した者もあり、集団疎開に参加せず東京に残留した児童も相当いたので、私は残留児童たちの世話と疎開地との連絡係をすることになった。

秋十月、疎開地の児童たちの拾った山栗と東京の本校に残った児童の給食のコッペパンを交換したこともあった。

十一月末、米軍のB29による最初の焼夷弾（しょういだん）攻撃があり、東京湾の方から飛来したB29の焼夷弾でプールの外の民家が何軒か焼けたことがあった。その晩、宿直をしていた私は防空壕から出て町の警防団の手おしポンプを手伝った。その水は講堂のそばのプールの水を使ったのである。このプールは防火用水兼用に急に作られたもので、七月末に完成し、疎開した児童たちもすこし泳いで名残おしそうに鬼怒川へでかけたのであった。

秋十月頃だったか、両陛下のお写真と教育勅語を奥多摩の小学校へ疎開したので、校長代理として宿直警備に二泊三日でかけたこともあった。

明けて二十年三月、疎開地の六年生は本校にもどって、希望者は私立中学へ願書を出したが、三月十日の下町の大空襲のため、試験は中止となり、願書を出した学校へ全員入学許可ということになってしまった。

四月からは一年生から全員が疎開することになったが、縁故疎開にも行けず、集団疎開にも参加しない児童が若干あったので、それらの児童は引きつづき本校で指導することになった。

五月二十四、五両日の大空襲で校舎のまわりの町は全焼したが、校舎の周辺の民家はまえもって強制疎開してあったので焼けのこることになった。しかし、講堂と理科室には何発かの焼夷弾がとびこんだが、三階に入っていた陸軍の部隊によって消しとめられたのである。

三月頃、理科室の化学実験道具を軍の方へ供出した。何で

もマッチ箱ほどの小さなもので協力な爆発力のある爆弾を作っているのだといううわさ話があった。あとで考えれば、日本でも原子爆弾の研究をしていたのかも知れない。

六月に入ると、残留の児童の世話は女教師にまかせ、男子教員は下町の焼けあとの金属回収に動員された。私は日本橋や銀座などのビルの焼け跡の金物あつめの作業をすることになったのである。

七月になって、疎開地の教師と交代して鬼怒川温泉の学寮へ行くことになった。私は福松という学寮で、五年男子三十数名と暮らすことになったのである。毎日温泉に入れるのは悪くはないが、腹がへっているので児童たちも元気がない。散歩につれ出しても、道ばたに腰かけてあまり動こうともしない。近所の農村へリュックをしょって野菜など買いに出ても、リュック一ぱいのトマトも三十数人の児童にわければたった一回でおわりである。終戦後、県の好意で、さつまいもやじゃがいもの特配があって何とか引きあげまでがんばることができた。

三十数名の五年生も十月の末に引きあげの時は、親や親類の人たちがつれに来たので、二十人にへってしまった。親が罹災したり、その他不幸な出来ごとのために気の毒な児童が何人かあったが、中でもS君は気の毒であった。

S君の家は門前でクリーニング業をしていたが、S君一人を集団疎開に参加させ、家族は蒲田の方へ移っていたのだが、空襲で一家が全滅してしまったのである。S君には十月の引きあげの時まで知らせてなかったが、叔父夫婦が引きとりに鬼怒川へこられたので、本人に話していただくことにした。S君がどんなにおどろき、悲しんだか、ほんとうにかわいそうなことだった。

あれから四十数年、S君は今どうしているだろうか、今思い出しても心が痛むのである。

（港区教育史資料）

卒業してから四十四年後の卒業式

◆岸田林太郎（76歳）

平成元年十一月十一日（土）桜田小学校体育館において、昭和二十年三月の卒業生に対して、四十四年後の卒業式が挙行された。当時桜田小学校は、三月九日をはじめ三回にわたる米軍の大空襲により、周囲は全部焼失し、焼け残った校舎に避難の人々がごった返した毎日であった。卒業のため疎開学園から引揚げてきた六年生は家を焼かれ、送った荷物まで汐留駅（貨物駅）で焼失するなど途方に暮れるばかりで、ついに卒業式を挙げ得なかった。

それが例年実施の同期会の日に、港区教育委員会、桜田小学校の御配慮により、卒業式挙行となったのである。式場は母校の体育館で、正面に日の丸と港区旗、周囲には母校の歴史を物語るさまざまな資料が並べられ、今日の卒業式を意義あらしめようとの温かい御心情とお骨折りが胸を打った。

式は、棚橋教頭先生の司会で進行。佐々木先生の伴奏による君が代斉唱。小林校長先生の訓辞。そして証書の授与。授与される名簿六十名の内、本日の出席者四十四名。ほとんどが他府県を含む学区外居住者である。

姓名を呼ばれて、一人一人壇上に上る足どりにみなぎる緊張感、校長先生より証書を受ける手のかすかなふるえ。静かな雰囲気の中に漂う感動の渦。……何と厳粛な、何と純粋なことか。社会のそれぞれの場で、主力となって活躍している充実した五十六、七歳の卒業生の真剣な面ざし。……女子組担任の宮崎先生とともに招かれて、この雰囲気に浸り、熱いものがこみ上げ、教師として生きてきた自分の幸を今日また再認したのである。

「あの日の式場は想像以上に素晴しい感動的なものでした」とは、例年の同期会とは異った今回の重い幹事役を果たした中西君、本田久連松さん、浦野さんからの手紙である。

この卒業式が挙行された事実は、桜田小学校の戦時実態を端的に物語るものである。証書には、昭和二十年三月二十五日卒業、平成元年十一月十一日の授与年月日が記されてある。このような卒業証書は、他の年代の者には授与されるはずはなく、全国でも稀少のもので、あの激烈な戦時の学習の苦闘と歴史の流れを秘めた卒業証書といえるのである。

思えば昭和十五年四月、桜田小学校に赴任、二年男子を担任して以来、卒業まで、五年間を共にした諸君である。戦争は次第に苛烈になり、ついに十九年八月二十九日、栃木県塩原町へ学童集団疎開の実施となり、教育の異常な戦時体制に突入した。親を離れ、住み馴れた東京を出て、子供心にも覚悟の疎開であった。疎開学園はもちろん、子供の生命を守り、心身共に強靱な人間の育成にある。

本校は左の組織のもと、全力を傾注した。

○第一学寮（本部）塩原古町　上会津屋旅館
　職員五、寮母六、児童一八五、作業員五
○第二学寮　塩原門前町　坂本屋旅館
　職員二、寮母二、児童七十、作業員二
○第三学寮　塩原古町　枡田屋旅館
　職員一、寮母一、児童二八、作業員一

授業の教室は、上会津屋に三年と五年、坂本屋に六年、枡田屋に四年の教室を設定した。

私は第三学寮長を命ぜられ、与えられた三年から六年の二十八名の全生活の指導と、授業は、六年男子学級の担任として全力を尽した。

子供の生命を守る。言うは易いが、容易ではない。九月早々、六年女子Aの扁桃腺四十度の発熱、冷すための氷がない。すぐさま数キロの福渡まで夜の渓流に沿う道を、自転車を飛ばして求めて帰り、一晩中枕辺に。翌日は子供たちの看病も得て心強かった。

六年男子Aの盲腸手術に立会う。Aは黙々として、終始がんばった心情には打たれた。親がついていたらわがままも言えたろうにと思う。

冬期酷寒零下一六度の朝、起床と同時に異例の温泉浴へ。戸外の朝の体操と組みかえての弾力的処置である。温泉は体を温めるが、同時に心を温めてくれる。夜の入浴は殊に重要な指導の鍵である。子供はいろいろな不始末を繰りかえす。そんな時背中を流してやりながらの訓戒には、心が通い合うのである。

何といっても食料の不足は一番心が痛むが宿舎の方々の絶えざる子供への配慮と努力はほんとうにありがたかった。第三学寮は小人数で、家内を寮母に採用していただいたことも、本部をはじめ全職員の深い理解に基づくものと忘れることはできない。子供たちと一緒にできた食事は好結果を生んだと思う。同じものを一緒に食べる。配給の酒も子供に見せての一杯に、大よろこびの子供たち。こんなことが信頼に結びつく大きな要因でもあった。

父兄の面会日は最もうれしい日。それを迎える準備活動も現実に即した勉強である。親が来ないでさびしい思いをする子がないように、宿舎全体の子の面会という心持ちでと父兄にお願いする。家族へ手紙を書くことは必要が生んだ大切な学習として、実力がついていく。三月の雛祭りは、手づくりの人形、工夫した雛壇など智恵を出し合っての楽しさがわく。疎開学園の諸行事で得た自分たちの班の賞状も飾られて、忍耐や努力、そして団結の尊さと自己向上の喜びを味わい合う。夜の黙学や自由時間にはできるだけ相手になってやる。宿舎の生活には無駄ということはない。

疎開学園全体の行事は、本部に程近い広場での朝礼で全体の精神力の高揚を期した。塩原の自然を存分活かした集団訓練や、班別対抗競技、宿舎の薪運びの勤労奉仕、そして歓声あげた栗拾いの楽しさ。

授業では最高学年の真の学力をめざしてがんばり合う。寝食と苦労を共にした友情と豊かな人間性を培いながら苦闘を乗り越える。

普通の卒業証書では到底考えられない戦時の教育が、この卒業証書からは一ぱいにじみ出る。その一端を思い出すまま記しながら、この教え子たちの幸を祈らずにはおられない。

集団生活で、激動の戦時を共に乗り越えてそれぞれの人生をたどり、平和裡に喜び合い励まし合う。同期会のいかに楽しいことか。今年もまた招待の電話をいただいて、老教師私の心もはずむのである。

幼ない頃の戦争―リュックを背負い一人で田舎へ疎開――

◆越川　綾子（53歳）

私は昭和十二年三月川崎で生まれましたが、父親が召集され、家業が女手では出来ず、芝田村町の母親の実家（商家）に三歳～八歳頃まで暮らしておりました。戦争体験といっても、幼い記憶に残っていますことを書き留めてみました。

太平洋戦争が始まっていても芝新橋田村町では、昭和十八年の十一月の七五三の祝いは晴着も新しく立派に誂えて、盛大に烏森神社であげてもらいました。その後十二月に弟が生れましたが、産院の樋口病院では、炊事場のガスもおかねを入れて湯をわかすといった倹約がはじまりました。

空襲の際の火災を防ぐためか、あちこちで家が取りこわされて、空地が目立つようになっていました。自宅にも二ケ所防空壕を掘り、家財も父親の郷里へ疎開させることになっていました。学童疎開もはじまりましたが、私は集団疎開か縁故疎開かどちらにするかきまらずに防空頭巾に、モンペ姿で南桜小学校に通っていました。空襲がはげしくなって、空襲警報が鳴ると電燈に布をかけて、暗くして、防空壕に入ります。一日に何回も出たり、入ったりしたこともありました。

少し静かになったと思うと、こわごわ防空壕のふたを上げて外の様子をうかがっておりました。サーチライトに照らされたB29から焼夷弾がバラバラと落ちて来ます。飛行機もはっきり見えるとても近いところです。アメリカの飛行機を目つぶしにしようと思っているのでしょうけど平気で、こちらから射つ弾は、一つも命中しません。空襲のたびごとにB29は数が増してきました。そしてとうとう三月十日の東京大空襲となり、いよいよこれでおしまいかと思われました。

南桜小学校から集団疎開した子供は、食物もなくひもじい思いをしている話を聞いて、あまりにもみじめで可愛想に思った両親は、私ひとりを親類のそのまた知人のところ岐阜の田舎に疎開させました。新橋駅のホームから愛宕山は手の届くように、目の前に見えます。現在は愛宕山を探すことの方がむずかしい位にビルが林立しています。東海道線のすし詰列車にゆられ、空襲の中を名古屋駅までは行きつきましたけれど、名古屋も大空襲に見舞われ、その先は不通になり、線路の上をまわりは火の海でとても熱くリュックを背に岐阜駅

まで歩きました。

五月の大空襲には、芝田村町にはおりませんでしたので、火の中を逃げ迷うことはのがれられましたけど、一瞬のうちに全て灰になってしまう戦争のいたましさは七、八歳の子供心にもつらい悲しい思い出となって残っております。

戦後の食糧難のことは、なおのことつらい苦しい年月でした。疎開して残っていた着物は全て買出しに行った際の食糧（米はわずか）いも、カボチャ等になり、ほころびだらけの物しか残っていません。さつまいものつる、カボチャの種を乾燥しておやつに食べたり、とうもろこしの黄色パンも食べさせられて、生きのびたのです。以後いまだに、戦後食べたそれらの物は、好きになれません。戦後何年月日が経過しようが、もう二度と体験したくない思いです。現在の平和が続くことをせつに祈るのみです。

桜田集團疎開學園

第三學寮（枡田屋宿舎）全員

先生と児童も御主人も寮母も作業員も一致團結した明朗枡田屋部隊。中央向かって左　御主人伊藤興市氏　右岸田訓導

（昭和20年１月28日撮影）

（提供：岸田林太郎さん）

一隅の碑

◇佐藤　彪也（80歳）

昭和十九年四月一日、私は東京市立光明学校に着任しました。当時、すまいは大門の近くでしたから通勤は市電で、古川橋停留場までした。戦雲は日増し激烈となり、空襲の噂が走り、主人を残し家族を地方に疎開させる家庭も増えてきました。日常生活の窮境を心ならずも呟く人もでてきました。市内の学校ももちろん、疎開を始めておりました。

古川橋停留場に降りますと、すぐそばの街角に田中屋さんという魚料理のお店があります。現在も続いております。その横を入りますと古川橋病院で、その西側の奥に日東山、曹渓寺という禅宗のお寺があります。その前が市立光明学校だったのです。初めてその校門の前に立った時の印象は今でもまざまざとよみがえってきます。桜もチラホラ咲き初めた時で誰もいない校庭の奥に文字通り古色蒼然とした木造二階建の校舎がひっそりと見えました。入り口はコンクリートのスロープで、ぎしぎしきしむ板張りの廊下に続いていました。職員室で初めて岡村正平先生にお会いしましたが、外には誰もおりませんでした。挨拶のあと、学校の概要を話しながら先生は校内を一巡して下さいましたが、驚いたことは二階に上るのに板張りの長いスロープができていたことでした。両側に木の手すりが取付けてありました。私は西も東も知らない肢体不自由教育の第一歩を踏み出すことになったのでした。その岡村先生も故人になりました。

学校は、明治四十二年東京市が肢体不自由児教育を目的として麻布本村町二百三番地に建設された臺南小学校が初めでした。大正十五年、麻布区に移管され麻布新堀尋常小学校と改称され一般の子弟を収容することになりましたが、昭和七年廃校となっていました。その廃校を改修、使用することが決定したのは七年三月末日でした。「東京市会史」によりますと「東京市立扶養学校設置1件」として寺部頼助市議の動議で可決されております。「港区教育史」をみますと、

昭和七年四月一日

東京市長　永田　秀次郎　印

東京府知事　藤沼　庄平殿

東京市立光明学校設置一件認可申請

とあり学校の名称が扶養学校から光明学校となっているのは永田市長の名付けによるものと後で知りました。創立当時の学校規模は、小学校六学級、定員一五名で合計九〇名。学校長のほか担任六名。整形外科医一名。看護婦六名。昭和十四年に世田谷区松原町に本校が建てられていましたので、麻布校には数えるほどの子どもが通学するだけでした。三年生担任でしたが全員欠席の日もあり、ただ一人の日もあります。乳母車で脳性マヒの女児を学校に送って、午後迎えに来る母親もありその子と二人二階の教室で弁当を食べたことも度々で、そこで警報（空襲）をきいたこともあります。そんな毎日が三ケ月続きましたが、昭和十九年七月一日、危険につき校舎は使用禁止となり、世田谷本校に収容されました。学校長は三代目の松本保平先生でした。私にはこの三ケ月は忘れ難い体験になったのです。本校は小田急線梅ケ丘駅の近くですが校庭の中に寄宿舎があり、現地疎開という特別措置を受け、庭の東南に大きい三基の防空壕ができていました。日夜警報の度毎に職員は子どもを壕に避難させておりました。

昭和二十年三月の江東方面の大空襲による夜空を焦す宙天もその壕を出て遠望しました。昭和二十年五月十五日、信州上山田温泉へ児童生徒職員一四八名は必死の思いで東京を脱出しました。その十日後、私のなつかしい幻の学校、麻布校は全焼。本校も三分の二焼失。光明学校は二十四年五月まで四年間疎開生活を続け、校舎と寄宿舎が建てられてから東京へ復帰しました。終戦も上山田で知りました。

昭和四十一年、公立養護学校設置特別措置法公布まで全国唯一校のみで活動しておりました。現在は全国で百五十七校になりました。私は昭和四十四年大田区内に都立城南養護学校が創立された時転出しそこで退職しました。

昭和五十七年、光明学校創立五十周年を迎え記念碑を建てようという提案が卒業生で俳人の花田春兆さんから出て、学校から港区にお願いに上りました。跡地は全部住宅地で往時をしのぶよすがもありません。区の御協力により曹渓寺前の絶江児童遊園地の一隅に碑が建ちました。除幕式は昭和五十九年三月二十日都、区、学校、ＰＴＡ、卒業生代表が集まり盛大に行われました。碑の表には肢体不自由教育、発祥の地、東京都港区の三行の清潔な文字だけで右側面に短文の趣旨が読まれます。伝教大師に「一隅を照らすものを国宝となす。」というお言葉があるそうですが、現在南麻布二丁目九番地絶江児童遊園地は平和な遊び場であります。その東北の一隅にしずまる小さい碑は、私には輝いているように思われます。

疎開児童を亡くして

◆竹本　博好（64歳）

昭和十九年になって　戦局もますます不利となってきた日本。私も十九才になった事だし、ここで直接戦闘に加わらなくては……と、御国のために、徴兵検査前に、志願をしようと海軍にあこがれの予科練に、そんな気持で、六月に親に内証で、願書を区役所に提出。六月に検査があり、大勢の若者が試験場にきた。学科試験合格。身体検査は心もとなかったが、どうにか合格の判を押されたのには、自分でもビックリした。いつでも、入団の覚悟をきめる。

やがて、夏休み近くなって、学校に行っている生徒の疎開話が実施されるようになり、私の妹も、小学校三年生だったので、親戚への疎開も考えたのだが、学校の集団疎開に参加するようになって、夏休みの終わる八月に栃木県の山の中のお寺に疎開がきまり、親元をはなれていった。

行ってからさびしくもなって、どうなっているか？と心配しながらの毎日、九月になって、もうじき面会が出来るという通知で、皆でたのしみにしていたところ、十月に入って、電報で「キトク」との事、そして、何分も、たたないうちに、「死ス」という通知が入って来た。あまりにも急な事で、ビックリしてしまった。

後で聞くところによると、食糧も非常に、ソマツになり、体も不調になって、腎臓病になっていたのだが、本人はふとってきた位に思っていたようだ。そして最悪の状態になって、医師に、きて診てもらい、注射を一本打って、間もなく、急変し、一緒に疎開に行った女先生のヒザにだかれて、一言、「母チャン」と言って、イキを引きとったとの事、今だったら問題になっていたことだろう。

亡くなった通知で、家の中が、テンヤワンヤになっているところに、私の入団通知が、十月八日に「横須賀海兵団に入団スベシ」と。

お悔みに来る人、お祝いに来る人、何とも言いようのないフクザツな気持だった。

急ぎ栃木県の疎開先に、遺骨を引き取りにゆき、近くのお寺に預け、私の入団のための祝いと、あわただしい中に、どうにか十月八日、横須賀海兵団に入団する事ができた。

学童疎開で死亡するというこのような事故はなかった事で、区民葬までする事になったという事を聞いたが、戦争によって、幼い子供が生きのびるための方法の疎開が、大変な犠牲になった事は、本当にやり切れない気持だ。

その後、私は、海兵団で二ケ月の教育を経て、豊川の通信学校五ケ月、ますます戦局も不利、サイパン玉砕、沖縄へ上陸、戦艦大和の沈没等々聞きながら、五月に横須賀航空隊に転属、東京空襲五月二十五日は、空が真っ赤になっているのに手のくだしようもなく、眺めているより方法がなかった。やがて、本土決戦にそなえて、上陸して来たら戦車に体当りの肉弾特攻の毎日の訓練で日を送るうちに、八月十五日、天皇陛下の玉音放送で、ポツダム宣言受諾(ダク)、終戦を迎える事になり八月末に復員する事が出来たが、我が家の前まできても、六本木から溜池まで焼土と化して、ガレキのままのところでボーゼンと立ちつくす状態だった。

九月二日、ミズリー号艦板上にての降伏調印式はそれから間もなくだった。

学童疎開

栃木県鹿沼町寺町仲よしこども会　昭和20年　（提供：池田愛子さん）

疎開

◆田所　久（76歳）

三月十日全部失った。翌日九段の自宅へシャベルとリヤカーを持って弟と一緒に掘りかえしに行った。ちゃんと火鉢も残り、中の物は少しこげただけで無事だった。

罹災証明によって疎開証明を配布され疎開への用意をはじめた。郵便局で疎開証明により毎朝一時間だけ一貫目の小包発送を許されて毎朝送りつづけた。手荷物は持てない私達親子だった。四月十八日発つことにしたが二日前、疎開証明を落としてなくしてしまった。麹町四丁目交番に届けたが、届無しとて巡査が自転車を方々に飛ばし、聞き合わせて下さったが駄目だった。ご親切に心ばかりのお礼を渡しても、受けとらない。警察へ行き受付の人にお礼をお願いした。受け付が署長さんに告げて下されたら署長室まで私は呼ばれ、受取れないが罹災証明を見て疎開証明を再発行をして下さった。

翌朝、駅の入口で見せ、ホームに入れてもらった。

ホーム内は一ぱいの人、地下も一ぱい、列に入り長時間待たされるので皆坐っている。

私達の乗車は夜の十二時の列車の通知が入る。発車間ぎわまで押さえられた群衆がどっと列車に向かって乗り込む。私はビリになってしまった。列車入口の段を一段上った所で両手で脇の鉄棒をつかんだ。後に兵隊さんが上り口に立って両手をひろげ私達親子を支えて下さった。「私がいます。大丈夫です」と言って下さった。真っ暗の中を列車は走る。しばらくして子供が「オシッコ」と言う。持って来た洗面器を出し「ここに」と言うと「イヤ」と言う。次の駅に止まった時、同時に素早く兵隊さんが子どもをだっこしてホームへ降ろしてくれた。人影も無い黒い駅。

「ウエダー」駅員の声がした。忘れられない声、すぐ発車しだした。闇をひたすら走る。ひしめく人の中、身動き出来ない。簞笥をしょった人、ミシンをかついだ男の人もいる。

トンネルを出たのかしら、朝の光、突然ひろがる風景、緑の平野、川がゆるやかに大きく小さく流れている。戦争をそのまま乗せて山腹をはしってる列車。

眼下は眼を見はる田園風景である。

田舎家が点々とみえる。青空の下に畑がある。遙かな山も

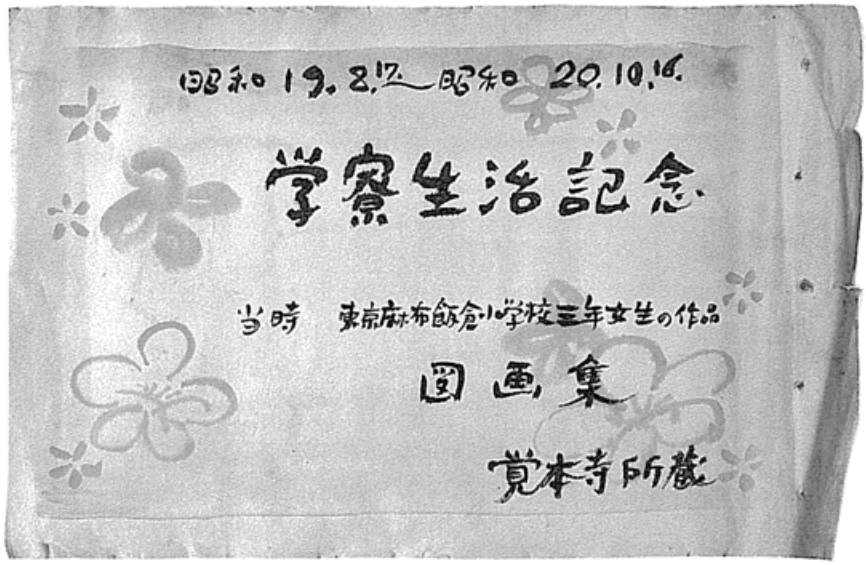
見える。川は大きく小さく蛇行して、近くの流れはしぶきを上げておどっている。

日本海、親知らずの波が岩にくだけては寄せている。もう石川県に近い。十四時間かかって能登部駅に着いた。荷物は富山の知人に発送してしまい、体だけで難民親子がおとずれ、姉もさぞ困った事だろうと今、つくづく思う。自分の助かることばかり考えていて、相手の事は考えなかった。迷惑をかけながら一ケ月程置いてもらい、近くの家を借りた。

やがて敗戦八月十五日となった。

全く平和の田舎生活でも大家さんは「ここまで、敵兵が我々をとりこにきたら皆で手をつなぎ、強力電気ボルトにつかまれば一緒に死ねるよ」と言った。八月二十日に出征した主人が私達の所へ来た。体が弱すぎて病院の仕事をさせられ、すっかり体をとりもどしたそうだ。リュックを背おい、ガッチリと明るい顔で帰って来た。翌日、夫は姉の子と我が子を連れ、川に魚をつりに行った。

二日目ぐらいで夫は東京へ帰った。今後の我が家の生活設計を立て迎えに来ると言って大きな西瓜（すいか）を持ってきた。私達は主人を見送ってから、楽しい気持ち一ぱいで、もらった西瓜をたべた。



（港区教育史資料）

娘への手紙

◆長　澄子（53歳）

A子さん

貴女が小学校五年の時、国語のB先生から「ご両親の戦争体験をお子さん達に伝えてあげて下さい」とご依頼がありました。その時、文集に載せた原稿は、もうありませんが、今、二十四歳になった貴女にあててもう一回、私の戦争体験を書いてみようと思います。

私は国民学校（小学校）二年の時、学童疎開で那須へ行きました。今でいえば林間学校のようなつもりで、元気に東京を出発したものの、黒磯の駅に着いたら辺りは真っ暗闇、おまけに秋だというのにもう、根雪が積っていて、急に心細くなったものです。

那須野の林の中に点在する寮には〝ひなぎく〟〝こまどり〟など可愛いい名が付いていました。世話をして下さる寮母さんも、上級生も親切で優しかったのですが、チビで弱虫の私は、どうも身体の大きい同級生が苦手で、何か言われるたびにメソメソ泣いたりしました。もう一つ困ったのが主食の大豆入りご飯。胃腸が弱いために、米より多い大豆が消化出来ず、つらい思いをしました。それでも、口に入るだけ上等の方で、学校、父兄共に食料集めに苦労されたとか。他校の疎開児童は食べるものが不足し、農家の畑から作物を盗んだケースもあったようです。好きだったのはスイトンと、短く折ったウドンを炊き込んだウドンご飯。たまに細いサツマイモが出れば大御馳走でした。いよいよお腹が空くと、図画の得意な上級生が紙にオムライスやサンドイッチ、ケーキやあめなどの絵をカラフルに色を付けて描き、皆でながめてツバを飲み込んだものです。

貴女達、姉妹が小さい頃、食べ残しをしてよく「食べ物がない国の子供達が、お腹が空いてどんなにつらいか、考えなさい」と、叱られましたね。その時貴女達は「だって目の前に食べるものがあるんだもの、お腹が空いた気持、なんていわれても分らない」といっていました。飢餓（きが）体験のない人には無理な話かもしれませんが、空腹は実につらいものです。特に子供にとっては、地獄といっていいでしょう。常に飢餓状態にある発展途上国の子供の写真の眼が、それを物語って

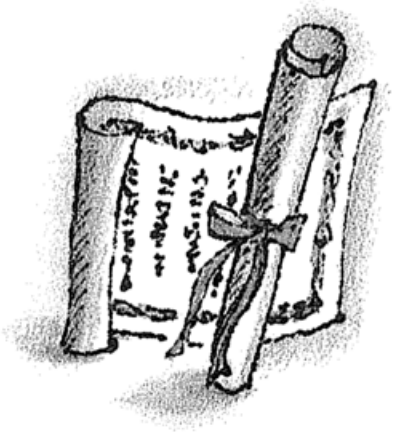
います。どんな小さな努力でもいい、あの子達の眼を、いきいきさせるにはどうしたらいいか、「分らない」といっていないで、考えてみて下さい。

楽しいこともありました。寒い冬はピアノの伴奏で〝春のうららの隅田川……と皆で合唱したり、夏は谷川での水遊び、湯元温泉まで林の中を列を作って歩き、旅館の大浴場で温泉を楽しんだこともあります。地元の小学校の運動会に参加して、走ったり綱引きをしました。

そして、二十年八月十五日、終戦。暑い日で、誰の終戦の日の思い出の記にも「暑い日だった」とあるところを見ると、全国的に晴天だったのでしょう。戦争は終わっても、戦災で自宅が焼けてしまった児童も多く、疎開学園は継続、私は夏休みに一時、東京の家（焼けてしまって、正確には〝壕舎〟）へ帰りました。家が焼けた跡をザッと片づけ、両親は半地下の壕舎暮らし。ドラム缶のお風呂が珍しく、夜になると、スノコの上に敷いた布団の枕元にコオロギが来て、コロコロ鳴きました。大事なおもちゃやお雛さま、そして何より好きだった「のらくろ」や「冒険ダン吉」等の本が灰になってしまったのは、つらく悲しいことでしたが、両親に囲まれて、久しぶりに安心して寝ることが出来ました。

どうにか一家で住める家がみつかり、東京へ帰れたのは、それから何か月も後でした。

戦争が終って四十五年、昨今は戦中回顧や〝けじめ〟論、戦争責任について等々、あらためて第二次世界大戦を考える風潮が高まって来ました。今回の港区による〝戦争戦災体験集、原稿募集〟もその一環でしょう。体験と一口に言っても、それこそ火の海を逃げまわった大変な体験から、私のように当時は子供で、お腹が空いた空いたで終戦を迎えた人もあり、百人いれば百通りの体験があると思います。体験集になったら、貴女も是非読んでみて下さい。グルメとダイエットが混在し、飽食の今の日本の根の部分に、人が人として生きられなかった飢餓が、かつてあったこと、戦争がどんなに冷酷に家庭を破壊し、市民生活を奪ったか、よく理解出来ると思います。

二十四歳になった貴女は社会の一員、平和な時代を満喫すると共に、過去に不幸な出来事があった事実を忘れないで下さい。

母より